

国際交流事後活動ニュース

# MACRO COSM

マクロコズム '98.5

◎特集 各都道府県IYEOの活動



vol. 22

(財)青少年国際交流推進センター



## 国際理解を深めよう

### 愛知県青年国際交流機構

すっかり定着した長谷茶園でのお茶摘み交流 ▶  
今年は、外国青年も交えて57名もの参加者



### 京都府青年国際交流機構

▼ 西川農園での留学生との交流会



## 国際理解を深めよう!

「国際理解を深める」というテーマは、古くて新しいものです。大上段に理論を振りかざすよりも、自分の周りに滞在している外国青年と自然なコミュニケーションが取れたらとても素敵なことだと思います

### 宮崎県青年国際交流機構

▼ クッキングパーティ「おいしいフランス料理を」







山梨県青年国際交流機構

「やまなし国際青年のつどい」

県民の森

◀ ウッドヴィレッジ伊奈ヶ湖

国際交流を広めよう!

ます。そんな日本社会が来るように、国際交流の楽しさと必要性を理解してくれる人を増やすのも大切なことです。仲間とともに、やれる所から始めて、長く続けられますように。



▲ ブラジル・ダンス教室

全国的に活躍しているプロ・ダンサーのカルロス・A・トヨタさんを招き、サンバを習う

静岡県青年国際交流機構

岡山青年国際交流会

◀ スノーパーティ'98



群馬青友会

◀ 国際交流イベント・スケート大会



## 国際理解を広めよう

### とっとり青友会

「WAになって語ろう」  
分科会テーマ  
～今後の県内における青年  
の国際交流について～



▲「岡山市成人式 20歳のつどい」にて  
活動報告パネル展を開催。新成人と  
ともに岡山市長を囲んで

### 岡山青年国際交流会



国際理解講座  
グアテマラの話しを聞いてくれ  
ますか  
徳島県青年国際交流機構



▲ 総務庁青少年国際交流事業参加応募者に対する写真パネル展  
兵庫県青年国際交流機構

### 愛媛県青年国際交流機構

◀ 愛媛県青年国際交流センターにて青少年国際交流パネル展



## 人と人とのつながりを大切に



日本青年国際交流機構会長  
酒井 洋幸

新年度にあたりまして、一言ご挨拶させていただきます。

去る3月の日本青年国際交流機構（IYEO）の第27回全国推進会議において、役員の新体制がスタートしました。大森前会長の後を受け、第4代会長として、全国の会員の皆様方からの協力、お励ましをいただきながら、精一杯努めたく思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて、財団法人青少年国際交流推進センターの設立からまる4年が経過しました。法人設立構想当時から準備作業に携わってきた一人として、全国の会員の皆様はもちろんのこと、多くの方々のご尽力、ご協力をいただき確かな歩みを進めることができたことに、改めて深く感謝する次第です。私たちIYEOの持つネットワークは、同センターという頼もしい基盤を得たことによって、着実に強固になり、かつ大きく育っていると申せましょう。

まず、国内的に特筆すべきは、総務庁の青少年国際交流事業の地方プログラムのほとんどが地方のIYEOのメンバーの参画を得て企画されるようになったことです。一部の地域はともかく、全国的には、ようやく一定レベルの体制が整ってきた証であり、これも長年の懸案が果たされたものと言えましょう。

こうした全国的な活動の活発化を裏付けに、平成10年度スローガンの「引き継ごうあの日の感動を、育てよう次の世代を」のとおり、参加事業こそ違え、素晴らしい感動体験をしてきた者たちの集まりである我々の経験を、国際交流活動を通じて、ひろく次の世代の人たちに分かち合い、勧めていく活動に取り組みたいものです。また、「広げよう感動の輪、楽しもう国際交流」のとおり、各地での事後活動の中で多くの仲間を巻き込み、大きな輪をつくり、自然体で国際交流を楽しもうではありませんか。ただし、私たちの活動の原点が、国際交流活動を通じてボランティア活動

### 主な内容

日本青年国際交流機構会長挨拶	5～6	国際理解講座（徳島）	13
第27回全国推進会議	7	フレあいクリスマスパーティ（栃木）	14
滋賀県若人の翼	8～9	日本・広島理解研修（広島）	15～16
インドネシアの風（香川）	10～11	オリンピック・ゲストハウス	17～19
ホームステイ英会話教室（三重）	12	青年海外協力隊募集	19

### 〈表紙の説明〉

「第8回世界青年の船」  
～上岡弘二団長 写真展～  
“青春群像 '96”の作品より

を推進する立場にあることを改めて自覚され、私たち一人一人が持つネットワークと様々な経験を一人でも多くの人々と分かち合う努力をしていきたいものです。

一方、国際的には、総務庁青少年国際交流事業によって生まれた海外青年との交流をネットワークとして育て確立していくことが、私たちの大きな願いの一つでしたが、この4年余りの間に「世界青年の船」のネットワーク作りが始まり、アセアンの「東南アジア青年の船」既参加青年組織との連携活動に続く大きな展開が見られたほか、韓国とも既参加青年ベースでの交流の充実などネットワークの再構築が始まっています。

「広げよう、世界へのネットワーク」。世界中に、日本の青年交流事業によって得た体験に感謝し、国際交流活動を通じて今後の交流を深めていこうと、意欲的なメンバーの輪が広がっているのです。彼らとの情報交換を行う度に、直接に会うことは

なくても、こうした共通の価値観で繋がれている仲間の存在は貴重なものであると実感されますが、こうしたネットワークがさらに強固かつ広汎に広がっていくことを期待してやみません。

社会に貢献しうる活動を展開するためには、多くの人材の力と理解、そして人々を結びつけていく努力が必要です。人々の出会いをより良き形あるものに築き上げていくためにも、事後活動としてのIYEOの組織活動の重要性を認識し、人の活きるネットワークづくりを目指していこうではありませんか。

最後に、日頃からご支援、ご協力いただいています皆様に、改めて御礼申し上げますとともに、以上のような活動への夢を持ち、実現に向けて一歩一歩進んでいくIYEOで在り続けるために、皆様方のご指導、ご協力方をもう一度お願いし、ご挨拶といたします。

## 日本青年国際交流機構平成10年度活動スローガン

### 1. 引き継ごうあの日の感動を、育てよう次の世代を

昭和48年度海外派遣 八木 実（神奈川県）

### 2. 広げよう感動の輪 楽しもう国際交流

昭和43年度海外派遣、第8回青年の船 宮崎 和子（神奈川県）

### 3. 広げよう、世界へのネットワーク

第14回青年の船 大橋 玲子（東京都）



## 第27回全国推進会議

(日時：平成10年2月21日(土)・22日(日) 会場：国立オリンピック記念青少年総合センター)

助青少年国際交流推進センターの設立から4年を経過し、日本青年国際交流機構と財団の二人三脚もすっかり定着して、各地での総務庁青少年国際交流事業への受入体制も整ってきつつあることを感じさせる雰囲気での会議でした。また、代表者の顔ぶれにも変化が出ており、最近の5年間の事業参加者も多く見受けられるようになりました。



平成10年度日本青年国際交流機構役員名簿

本会議の重要議題の一つは、日本青年国際交流機構本部役員改選でした。6年間の在任期間中で財団の設立から定着までの道程に大きく貢献した大森充会長が退任し、日本青年国際交流機構で初めて東京以外の地から会長が選任されました。新会長の酒井洋幸氏は、奈良県在住で勤務地は大阪府です。以下、各ブロック幹事を含めて24名の役員が選任され、顧問及び参与の指名も行われて今後2年間の体制が決まりました。

今回の会議においては、日本青年国際交流機構の活動方針や活動スローガンも話し合わせ、平成10年度活動スローガンは、公募によって集まった作品約50点の中から3点が決定されました。

役 職	氏 名	
会 長	酒 井 洋 幸	
副 会 長	三 浦 博 史	
副 会 長	焼 野 津 人	
副 会 長	小 塚 昭 郎	
副 会 長	早 川 理 恵 子	
副 会 長	椿 景 子	
幹 事	事務局 長	大 橋 玲 子
	事務局 次 長	山 本 克 己
	事務局 次 長	赤 澤 美 雪
	組織 担 当	篠 崎 浩 子
幹 事	企画 担 当	鈴 木 芳 信
	国際 担 当	森 田 正 英
	国際 担 当	田 中 南 欧 子
幹 事	広報 担 当	桶 谷 正 一

監 査 役	鈴 木 光 雄	
監 査 役	岡 坂 久 隆	
ブ ロ ッ ク 幹 事	北海道東北	佐 藤 周 一
	関 東	和 久 和 夫
	北 越	田 中 克 宜
	中 部	鈴 木 伸 彦
	近 畿	山 口 英 雄
	中 国	中 野 智 昭
幹 事	四 国	川 田 宗 範
	九 州	安 東 敏 眞

顧 問	寺 下 英 明
顧 問	奥 野 照 義
顧 問	坂 田 清 一
顧 問	大 森 充
参 与	殿 村 立 雄
参 与	柊 巖
参 与	大 谷 直 義

最近、都道府県 IYEO からアセアン各国を中心にスタディツアーとして訪問する機会が増えてきました。参加団員の募集、事前研修、本番、報告書の作成等まで、スタディツアーを成功させるためには、綿密な計画と陰で働くスタッフの力が欠かせません。

滋賀県青年国際交流機構では、過去 13 回「滋賀県若人の翼」として、スタディツアーを行っており、日本人参加者にも訪問国の方にも「よい派遣団である」と好評です。今回は、スタディツアーのノウハウを伺ってみました。

### 「滋賀県若人の翼」 スタディツアーを実施するにあたって ～「東南アジア青年の船」のネットワーク活用～

滋賀県青年国際交流機構会長  
兩宮美津子

平成 9 年度実施の「滋賀県若人の翼」は、事業を開始して早くも 13 回目を数え、今回は事業を実施して行く中での、広報・事前研修・本番・報告書作成にいたるまでの、事業の組立てについて、また今後の相互交流について述べたいと思います。

#### 〈本研修の実施日の設定について〉

総務庁の海外派遣事業には、限られた人しか参加できない事から、その「さわり」だけでも多くの青年に体験してもらう為、実施日は土・日・祝日を挟み、なるべく会社や学校の休みを少なくした日程にする事が大切な事です。実施日が決まれば、計画日程を立てます。

#### 〈予算の設定について〉

現地での交流活動については、奨青少年国際交流推進センターより受入側の代表者と連絡を取ってもらい、費用の相談を行います。その他の部分については（主に飛行機代とホテル代）地元の旅行会社に（本年度は 8 社から）見積もりを依頼し、

参加費を算出します。本年度は 2 か国訪問の為、参加費が高かった為、事前研修費は別予算に。

#### 〈開催（募集）要綱とその広報について〉

後援名義依頼の承諾が得られたら、開催（募集）要綱を作成し、その広報として、県から各市町村の広報担当主管に開催（募集）要綱を送付し、地域の広報紙にて青年達に知らしめてもらいます。

また、各市町村の教育委員会・IYEO 会長・既参加青年にも案内を送付し、募集を開始します。

#### 〈事前研修〉

本研修をより楽しく・有意義なものにする為、一泊の事前研修を行います。

本研修での日程の説明や（現地では、突然に日程が変わることもありますので、ある程度幅を持って説明している）、各団員の役割の決定、現地の予備知識を得たり、現地での文化交流会でのスタンスの計画等で、大変充実した 2 日間です。団員の心も一つになり、また本研修不参加の IYEO 役員との交流もできます。



### 〈直前研修〉

出発前に、空港のどこか空間を見付け出発式を行います。団員の多くは、初めて体験するホームステイで、期待と不安で緊張しています。現地の空港で、現地青年の出迎えに会うまで、スタッフも期待と不安で緊張します。しかし、「東南アジア青年の船」の各国同窓会に依頼した場合は、到着後の日程は彼らが、全ての手配を行ってくれますので、安心して現地の青年達との交流を図る事が出来ます。(日本からの旅行者の添乗員の同行は必要ありません)

### 〈報告書の作成〉

事前研修にて、報告書のテーマを決めておき、帰国後1か月ぐらいで各自より原稿を提出してもらい、報告書編集係が数回集まり、報告書を作成します。

### 〈事後研修会〉

写真の交換会と合わせて、事後研修会を行います。本年度は、「国際交流と理解の集い」と称して、県内の留学生や研修生との交流を図る事も兼ねて「大運動会」を企画し実施しましたところ、他にも多くの青年達が集まり、有意義なものができました。最後のアンケートでは、以後の活動にも協力するとの回答が多々あり、スタッフ一同嬉しいものでした。

### 〈その他〉

本年は、「滋賀県若人の翼」で訪問したブルネイの青年達が、滋賀県に来訪予定との事で「滋賀県若人の翼」に参加した青年達で、受入の実行委員になってもらい、事後活動と継続的な交流に励んでもらいたいと期待しています。

### 「1997 滋賀県若人の翼」計画日程

1月	実行委員会開催 旅行会社に見積もり依頼
3月	旅行会社から見積もり回収 旅行会社の決定
5月下旬	予算及び旅程計画・募集要綱(案)の作成
6月上旬	県ほか後援依頼(予算書・募集要綱(案)を添付)
6月中旬	各機関より後援承認をもらう 各市町村の広報担当課へ掲載の依頼募集要綱の印刷
7月初旬	募集要綱の配付・募集開始 各市町村の教育委員会及び会員・関係機関への募集要綱の配付
7月～8月	団員の応募・スタッフの編成
9月初旬	募集締切/内定通知の発送 事前研修の要綱の発送 事業計画を県へ提出
10月中旬	事前研修(1泊2日)
11月下旬	本研修(5泊6日)
12月下旬	決算書・報告書の作成 後援名義承認の機関に事業報告書の提出(決算書等を添えて)
1998年	
2月下旬	事後研修・報告書の作成



香川県 IYEO では、香川県海外派遣友の会（香川県の海外派遣事業の同窓会組織）が行っている JICA の青少年招へい事業受入の援助をさせていただいています。今回その事業のプログラムの中

にあるフォローアップ研修に参加する機会を得て、インドネシアを昨年12月9日～15日という日程で訪問し、大変貴重な経験をさせていただきました。

香川県青年国際交流機構

田代 雅一（第5回世界青年の船）

## インドネシアの風

スカルノ・ハッタ国際空港の到着ロビーを出たとたん、湿気を含んだ30度のなま温かい風に包まれながら、私にとって初めての東南アジアの旅が始まった。旅と言っても今回の旅は JICA のアフターケア調査団という大事な任務があり、5泊6日のハードスケジュールであり、のんびりとはしてられない。さらにその内の1泊はホームステイなのだ。しかし心配しても仕方がないので、とりあえず一日一日を精一杯がんばっていこうと決意したのであった。

### 交通渋滞にびっくり！

ジャカルタに着いて最初に出くわしたのは、交通渋滞である。とにかく車が多い。地下鉄やモノレール等の交通機関がなく、車、乗り合いバス、オートバイ、パジャイ（オート三輪車を改造したもの）が皆の足となっているので必然的に交通渋滞が慢性化している。我々調査団も、滞在中はこの交通渋滞に常に悩まされることとなった。

このように車が多いせいで、排気ガスにより空気が汚れている。その証拠に、オートバイに乗っている人は皆マスクをしている。エアコンなしで窓を開けて走るのはとても私たちには耐えられそうもないようだ。

極めつけは、なんといってもトイレである。インドネシアでのトイレとは、いわゆるトイレと洗面所、お風呂の三つの機能がひとつになった部屋のことをいう。その部屋には、水をためておく水槽があって、便器は日本式の金隠しをとったような便器である。用を足して流すのも、お尻を洗うのも、はたまた体を洗うのも水槽の水をひしゃくでとってその水で洗う。従ってトイレの床は常に濡れていて、それが私にははじめどうにもなじめなかったが、何ともユニークかつ機能的なトイレである。

### ホームステイでの体験

今回のプログラムの中で、一番インパクトの強かったのはやはりホームステイプログラムであろう。私がお世話になったホストの方はヘリーという29歳の公務員だった。どちらかというところ庶民的な生活をしていて、ホームステイ中は大変貴重な経験を三つさせてもらった。

一つめは、彼は車を持っていなくて、同じ職場の先輩のナシルさん（彼は古いバンを持っていた）に運転を頼んでいた。ヘリーの家はホテルから1時間30分くらいのところで、家は国から支給してもらっていた。（国から支給してもらった家はか



なり郊外になるらしくそれが嫌な人は自分で家を買らしい。)車に乗ると、ナシルさんが「インドネシア、パナス(インドネシアは暑い)」といって、かまわないから窓を開けろとジェスチャーで私にいった。ホテルから30分ほど舗装道路を走ったところで、急に補足で舗装していないでこぼ道に入った。その道を1時間ほど、排気ガスと土埃の混じった自然のエアコンに私は、背中を伝う汗とインドネシアの風を感じていた。

二つめは、トイレの印象が変わったことである。インドネシア式トイレといえば、公共のトイレしか見てこなかった私は、一般家庭のトイレに入ってその印象が変わってしまった。トイレの床全体が濡れてはいるが、非常にきれいにしているのである。彼らは家ではほとんど裸足で生活しており、また、気温が高いのも手伝って、トイレの床が少々濡れていようが、洗ったお尻が濡れていようがすぐ乾くのでおかまいなしのようだ。実際生活してみると、彼等のトイレの方が常に掃除をした後のようで、非常に清潔ではないかという印象さえ感じられた。さらに、水でお尻を洗うのは、今、日本ではやりの自然ウォッシュレットではないか。そう思うとトイレも汚く感じられず、快適に過ごすことができた。

三つめは、彼らの心の温かさである。ヘリーの実家でもナシルさんの家でも、行くところどこでも大変な歓迎を受けた。座ればたちまち料理やお菓子が所狭しと並べられ、飲み物がでてくる。私が暑そうにしているとどこからか大きな扇風機がでてきたりして、私にいっぱい歓迎してくれた。さらに、暑さと疲れと緊張でフラフラになりながらベットをめざしてヘリーの家に着くと、近所の

人たちが夜遅いにもかかわらず、家の前でごちそうを用意して私たちを待っていてくれた。さすがに体力、胃袋の限界を感じた私は、丁重にお断りをした。(次の日は、朝4時30分起床でハイキング、交流会、出国なのだ。)

今回の派遣で感じたことは、KAPPIJA(インドネシアにある同窓会組織)のメンバーだけでなくその周りの人達にとっても日本は特別な国になっているのだということだ。KAPPIJAのメンバーにとって日本での体験、特にホームステイプログラムは大変に素晴らしいものであったと同時に、その周りの人もKAPPIJAのメンバーを通して日本に特別な思いを持ってきているようだ。

## 友情の風

5泊6日の短い滞在ではあったが、JICA事務所、日本大使館、学校、福祉施設訪問等のホームステイを含むハードスケジュールは、KAPPIJAのメンバーがいかにも私たちにジャカルタのこと、インドネシアのことを知って欲しいか、そして彼らがこのJICAの事業にどれだけ感動したかをあらわしている。

このJICAの事業は、地道ではあるが着々とインドネシアと日本の青年たちの掛け橋となっている。そして今後、必ずこの成果が現れてくるだろう。私はその現れの第一歩である友情を、今回の訪問でひしと感じた。最後のスカルノ・ハッタ国際空港で吹いてきたインドネシアの風には、彼らの優しさや友情が混じったなつかしい香りがした。その風を受けに「インドネシアにまた来たい」と思ったのは私だけだったのだろうか。



## 東南アジアのイスラム教の人々を迎えるための質問会とホームステイ英会話教室

三重県青年国際交流機構会長  
林 由希子

ホームステイを受け入れることは、昨今あまり珍しいことではなくなりました。

1年に1回は受け入れを決めているご家族や、すでに数カ国の外国人を受け入れたというベテラン家族も少なくありません。しかし、私ども三重県青年国際交流機構では、なるべく新しい方々にホームステイの経験をしていただきたいと考えてきました。国際交流の裾野を広げるためには、より多くの人々に受け入れを経験していただくべきだと考えたからです。

今回、「東南アジア青年の船」を受け入れるに当たり、特に初めてホームステイを受け入れてくださるご家族が、どのような情報を欲しているのかを協議し、それらのニーズに沿った情報発信をしようと、研修会を設けました。

まず、初めて受け入れる家族はゲストとコミュニケーションができるかどうか不安であること、そして「東南アジアの青年の船」にはイスラム教徒も多く、宗教上の規範に沿った対応がしたいと考えていることが分かり、次の2部構成で研修を行うことにしました。

### イスラムの人々を迎えるために

#### ～質問会とホームステイ英会話～

#### 1. イスラム教とは

- ① 食事について
- ② お祈りについて
- ③ トイレ・風呂の使用について
- ④ その他（手・犬・タバコ・酒など）

#### 2. ホームステイ英会話

- ① 初めまして
- ② 玄関先で
- ③ 風呂の使い方を説明する
- ④ 食卓で
- ⑤ 元気がなさそうな時に
- ⑥ さようなら

この研修会の特徴は、

1. 東南アジア出身のイスラム教徒の方に講師を依頼し、参加者からの質問に直接答えてもらう。
2. 住宅展示場を会場とし、英会話は実際の部屋や風呂、トイレを使いロールプレイングを行う。

以上2点に焦点を当てて行いました。講師はバングラデシュ出身のシディッキさんに依頼し、茶菓をいただきながら、家庭的な雰囲気の中で質問会が進められました。

第2部での英会話では、ホームステイ中に必要とされる項目に絞り、実物の玄関先や風呂場などで1人ずつロールプレイをしていただくという、声と動作を伴った実際に近い環境の中で行いました。

参加者からは、「不安が多少解消された」「ホームステイファミリー間の交流も出来て良かった」などの評価をいただきました。また私ども青年国際交流機構の宣伝にもなり、一石二鳥の成果を得たと自負しています。

## IYEO 国際理解講座（中南米地域）

## グアテマラの話聞いてくれますか

徳島県青年国際交流機構  
長谷 由里

徳島県青年国際交流機構では、平成9年12月7日(日)に「国際理解講座」を開催した。

今回は、東京に事務局がある国際協力NGO「日本ラテンアメリカ協力ネットワーク」に協力していただき、徳島ではほとんど知られていないグアテマラについてのビデオ上映と講演会を行った。

## グアテマラの歴史

グアテマラは中米に位置する、自然の美しい国である。人口約1千万人でそのうち60~70パーセントが先住民である。コロンブスの「到達」以前には、マヤ文明が栄えていたが、“侵略者”スペイン人により彼ら民族の伝統と文化を踏みにじられ、抑圧と搾取の歴史を生きてきた。

1960年から始まった内戦は、1996年末に和平合意がなされるまで36年間続き、1980年代には、軍による先住民大量虐殺が繰り返された。しかし、1996年12月29日の政府とゲリラとの和平合意によって、すべての問題が解決したわけではない。グアテマラは平和で平等な社会を作るためのスタート地点に立ったところである。

## 映像と講演会

「国際理解講座」の当日は、先にビデオ上映をしてから、講演会を行った。ビデオ約50分程度

の長さで、講演会の前に上映するのは長すぎるのではとの懸念もあったが、実際まったく情報のない国であるため、映像はやはり効果的だった。(この時のビデオ「風の記憶」は、グアテマラのサンティアゴ・アティトランという小さな村で1992年に起こった軍による先住民の虐殺を主題にしている)

講演会は、グアテマラ先住民女性の組織でボランティア活動を行っている石川智子さんが、グアテマラの歴史や先住民女性達の置かれてきた状況、和平合意後の状況について、分かりやすく講演して下さいました。「国際理解講座」自体、初めての試みだったが、今後の自信もできたように思う。

終わりに、「国際交流」「国際協力」といっても、日本で話題にならない国はたくさんあり、そこで何が起きているか、私たちがすべきことは何かについて、無関心過ぎないだろうか。私自身の反省も踏まえて、これからも、「日本で、そして徳島で知られてない国」の「国際理解講座」を開催していきたい。

今後も、皆様方のご指導、ご協力をお願いします。





## ちょっと自慢したい

### 「フレあいクリスマスパーティ」

栃木県青年国際交流機構会長  
交流グループ「フレあい」代表  
手塚美保子

“Now, Ladies and Gentleman, I would like to present you International Fashion Show!”

司会者の言葉に会場は一瞬シーン、しかし期待の静寂がたちまち大爆笑に変わった。スポットライトに照らされ、入場してきたのは各国の民族衣装をまとった美男美女(?)の一団。サリー姿の美女を先頭にアジア各国・アフリカ・南太平洋・北欧・中南米など今まで私達が訪問したり、招へい事業で来日した際、ホームステイされた方にいただいたりした約30か国の民族衣装が、今回のパーティの参加者によって披露された。なかには目を覆いたくなるような人もいたり、本当にその国の人かと思うほどピッタリの人がいたりで、パーティは最高潮に達し、参加者の喚声と笑い声は終了まで続いた。

「フレあいクリスマスパーティ」は、昭和63年12月20日に第1回、都合で1年休んで今回で第9回を迎えた。1回目は中国から来ていた、研修生7人と日本人10人くらいで開いたごく小さなパーティだった。年々参加者が増え、とくに今年は栃木県IYEOとの共催ということもあり、申込みは150名を超えた。実際の参加者は180人という大人数で、準備の段階から実行委員は嬉しい悲鳴を上げ続けた。半数は外国人、しかも様々な国の人達、赤ちゃんから80歳を超えるお年寄りま

で、このパーティの最大の特徴はこの幅広い層の参加者である。だから皆が楽しめ皆が喜んでくれるためにはどうしたらよいか、毎回内容については実行委員の頭の痛い所だ。

### 司会は小学校6年生

今年は、司会進行は小学生の会員が担当した。1年生の挨拶はたどたどしさがとても微笑ましく、6年生の司会者の大人顔負けの上手さに驚かされた。子供たちとお母さんのグループによる創作劇は、毎年見ているだけではつまらないと名乗りを上げた、2家族による、「現代版ウサギとカメの物語」。言葉が分からなくても誰にも理解できる楽しい劇に拍手喝采。すっかり女優気分のお母さんたち、今から来年の演目を考えているとの事。出演希望者が多く、ここ3年は実行委員の出る幕がないのが少々寂しい気がするくらい。

いくつかのグループに分かれての対抗ゲームあり、豪華景品が当たる大抽選会ありと、2時間30分がアッという間に過ぎてしまった。

会場で出される料理は全部私たちの手作りだ。参加各国のお国自慢の料理、ケーキ類、ちょっとしたホテルのパーティなど比べ物にならないくらい豪華。それが9回を通して同じ物がほとんど出ていないのだから。これを楽しみに毎年参加する人もたくさんいる。会場の飾り付けも自分たちですべて行い、参加者全員に持ち切れないほどたくさんプレゼントを用意する。会費(大人2,000円、小中学生1,000円)は決して高くない証拠に、帰り際に来年の予約をしていく人がたくさんいる。

## 参加者が主催者

外国から花嫁さんをもたらした家族、近隣の工場  
で働く外国人たち、栃木県内で研修している外国  
人たち、彼等は1年に1度このパーティで会うこ  
とを楽しみにしている。今年は、隣の茨城県から  
も3家族が参加してくれた。口こみで広がって  
いくのがとても嬉しい。また、子供達の大きくな  
っていくのが分かり、その子たちが数年すると実行  
委員になってお手伝いしてくれるのはもっともっ  
と嬉しいことだ。

職業、国籍、人種を問わない、参加者が主催者  
でもあり、赤ちゃんからお年寄りまで皆で大切に  
作り上げているこんなパーティはどこにもないと、

少しだけ自慢したい。

パーティの最後は参加者全員で輪になり「きよ  
しこの夜」を合唱した。皆最高の笑顔で歌ってく  
れた。伴奏が終わってもなかなか組んだ肩が離れ  
ず、涙を流す人達もいた。

「皆様楽しんでいただけましたか？ 来年の12月  
23日、またこの場所で会いましょう！ 友人でも  
恋人でも新しい家族でもOK、素晴らしい仲間を  
たくさん誘って来て下さい。来年まで皆さん元氣  
で、勉強もお仕事も一生懸命頑張りましょう！  
再会の日を楽しみに待っています。ありがとうご  
ざいました。どうぞ良いお年を!!」

パーティのお開きの挨拶でした。

# 青少年国際交流・ひろしま'97

## 日本・広島理解研修

広島県青年国際交流機構

埜 泰雄

Welcome to HIROSHIMA!

1997年7月11日～25日の2週間の日程で、  
「青少年国際交流・ひろしま'97」が行われた。

このプログラムは、世界各地の広島県人会との  
つながりによって、広島と縁の深いアルゼンチン、  
ブラジル、パラグアイ、ペルー及びアメリカ合衆  
国から35人（引率者含む）の青少年が、広島を  
実際に見、感じ、広島の青少年をはじめ、多くの  
広島の人々との交流を深めることによって、心豊  
かで国際感覚あふれる青少年の育成を図り、若い  
世代による新たなネットワークづくりを推進する





目的で実施したものである。

参加青少年は10～18歳で、プログラム期間中にホームステイや平和学習、学校体験入学、こども会議出席など多忙なスケジュールをこなす。その中の半日を、我々広島県IYEOが担当した。

### 日本を知ってもらおう！

担当した項目は、「日本・広島理解研修」というタイトルで、日本・広島に対する理解を深めてもらうとともに、自分の国との違い等も学び、国際理解の促進に努める。そして、将来に向けて興味や関心を持ち続け、日本・広島のよき理解者・協力者となることを期待するものである。

内容としては二部構成とし、第一部では「学習」、第二部では「体験」という構成とした。一部の「学習」では、日本の生活や文化、広島の概要等を四季を通して説明した。日系の子ども達がほとんどということで、移民の歴史をメインにする案も出たが、なるべく県人会にこだわらずにこの事業を広めていきたいという主催者側の意図もあり、移民についての説明は省略した。

広島の説明では、地図を利用して広島の位置確認をし、その後写真や県地図を使い、広島県の歴史や地理等の紹介をした。忙しいスケジュールの中で広島のことを深く知るという機会はなかなか無いようで、子ども達は「ふーん」と言いながら興味深く説明に耳を傾けていた。日本の文化紹介の説明では、写真を使ってお祭りや花見、初詣の写真等を紹介する他に、「はっぴ」「学生服」「はんてん」等をそれぞれの行事の説明時に、子ども達に実際に着てもらった。元気一杯の子ども達は、喜んでこれらの衣装にトライしていた。

第一部終了後、子ども達は男女にそれぞれ分かれて別室に移動し、全員ゆかたに着替えさせてもらった。着替え終わった子ども達は、我々の待つ部屋に入って来た。

続いて第二部では、日本の夏祭りを疑似体験するというので、出店の体験を行った。この事業の間中、毎日忙しいスケジュールを送っている子ども達に、息抜きのつもりで、せめてリラックスしてもらおうと考えた。出店の種類としては、綿菓子、かき氷、けん玉、スーパーボールすくい、輪投げなどを行った。なかには、祭りの出店とあまり関係の無いものも含まれていたが、子ども達には大人気であった。

今回の研修で我々が会った子ども達は実に明るく、屈託のない子ばかりであった。個人によって程度の違いはあるが、おおむねどの子ども達も積極的で、自分が担当する我々の方が助けられたような気もする。何はともあれ、楽しそうに歓声を上げていた子ども達の笑顔が、今回の研修の成果ではないだろうか。



## ドイツオリンピック・ゲストハウスは 「世界青年の船」既参加青年の家!

静岡県青年国際交流機構事務局長  
佐野 育子

金メダル12個、銀メダル9個、銅メダル8個…。この2月に行われた第18回冬季オリンピック長野大会でメダルを最も多く獲得したのは、東西統一前のステート・アスリートの伝統を色濃く残すドイツ。このドイツの強さを支えたものは?その答えはドイツ・ビール、ドイツ料理、ドイツ語でのオリンピック中継! 本国さながらに過ごせる場所が長野市内にあったのである。この場所に来ることでリラックスできた選手たちが、競技で大活躍したわけだ。

オリンピックの有力参加国中には、ゲストハウスを開催都市に設置する国がいくつかある。ゲストハウスは開催地入りした選手や報道陣のために設けられる施設。母国の料理が提供され、母国向けのオリンピック中継の番組を見ることができる。今回のオリンピックでも数か国が長野市内にゲストハウスを設置したが、ドイツがゲストハウスのために選んだ場所は…なんと寺だった。

長野市南部にある名刹・蓮香寺。14世紀の南北朝時代からの伝統を持つこの寺は、「第6回世界青年の船」に参加し、長野県青年国際交流機構の会長を務める樋口敦子さんの自宅である。

ひょんなことからオリンピック観戦の機会に恵まれた私と國分由佳(静岡 IYEO)は、彼女と連絡を取り、2月13日に蓮香寺を訪問することになった。

### お寺の中はドイツ!

13日朝、JR篠ノ井駅からタクシーで蓮香寺に向かう。この駅は開・閉会式の会場となった南長野運動公園の最寄り駅であるため、駅前通りの両側は万国旗で飾られオリンピック・ムードでいっぱい。だが一步裏手に入ると、典型的な日本の地方都市の住宅街の光景となる。ちょっと違うのは、その住宅街の中を外国人観光客が地図を片手に迷い込んで来ている点だ。

3分ほどで到着。門前へ至る道にはドイツ語の横断幕が掲げられている。寺の門にも「Team Olympia」のサイン。東洋と西洋の文化が不思議と調和した光景が目の前に展開する。

やがて敦子さんと対面し、裏口から寺院内に案内された。土間にはドイツ・ビールの樽が高く積み上げられ、なぜか食べ残しのドイツ・パンも転がっている。

寺の執務室は、ゲストハウスのオフィスと化していた。パソコンが数台並べられ、ゲストハウスでのイベントや日本文化のドイツ語での説明が打ち込まれている。電話の呼び出し音が絶え間なく鳴り響き、なんとも慌ただしい雰囲気だ。

次に通されたのは100畳あるという庫裏。が、畳の上には立食用のテーブルが所狭しと並べられている。室内にはドイツ国営放送によるオリンピッ



ク中継の映像が流され、空気はすっかり「ドイツ」一色！ 私たち日本人が異邦人になってしまったようだ。そして庫裏の片隅に陣取っているのは、ビールを供するカウンター・バー！ なんともビールを愛するドイツらしい光景である。

その隣の30畳ほどの応接間に設けられているのはテレビ放送用のスタジオ。テレビ・カメラと照明器具が設置され、寺の庭園をバックに番組が撮影されるわけである。ドイツには2つの国営放送局があり、2日交代でこのスタジオを使用しているとのことであった。

応接間の外には寺自慢の庭園があり、それを挟んだ対面に位置するのは茶室。ここでは茶の湯の紹介が時折行われていて、選手が茶を嗜みながら庭園を眺めているといった光景が見受けられたようだ。

細くて暗い廊下を歩いて案内されたのは本堂。正面には大きな御本尊が鎮座し、天井からはトルコ製の巨大なシャンデリアが吊られている。ここには近代的なプレス・センターが設けられていた。メダルを獲得した選手たちがドイツのジャーナリストを相手に記者会見を行う場所である。普段は仏事を行うため多くの人々が集まることから、床暖房を導入している。この床暖房も、信州の冷えの中で慣れない靴無しの生活をしなければならないドイツ人には好評だったようだ。ちなみに、ゲストハウスとして使用するか否かの交渉の際、某

国も借用したいと打診していたそうだが、「靴だけはどうしても脱いで利用して欲しい」という寺側の条件を飲めたのがドイツだったとのことである。(が、靴なしの生活で大丈夫？という寺側の心配にもかかわらず、ドイツ側に大ウケだったのは大きなコタツ3台だった!?!らしい…。)

最後に案内してもらったのがケータリングのコーナー。ドイツから引き連れてきた6人余のシェフらが腕を振るったドイツ料理がずらりと並ぶ。こ

の料理を食べるため、選手たちが近くの選手村からやってくる。そればかりか、市中心部に泊まっているドイツのオリンピック関係者もわざわざ通ってくるそうだ。母国と変わらない味を提供される環境があるなんて、なんて幸福なことだろう！



▲ 女子アルペン複合で金・銀・銅を独占したドイツ

## 樋口家の努力に脱帽

これだけの条件がそろった場所を探し出したドイツのオリンピック委員会の奇抜なアイデアに脱帽するしかなかった。が、日本の一地方都市の寺院がその長い歴史の1ページにこんな出来事を書き加えることになるなんて、誰が思っていたらうか？ 樋口家の人たちも、この出来事で大忙しになってしまっていた。

樋口家にはゴールデン・レトリバーのセナちゃん(♀)がいる。可哀相なことに、彼女は寺の奥

の部屋でひっそりと過ごしていた。大忙しでなかなか時間のとれないご主人とのスキンシップが激減してしまったセナちゃんは、なんと神経性の脱毛症になってしまったのである。この歴史的な国

際イベントとドイツ勢のメダル・ラッシュの陰で、毛を失いながらもストレスに耐え抜いたセナちゃんと激務を乗り切った樋口家の皆さんに拍手を送りたい。

## 青年海外協力隊「平成10年度春の募集」について

青年海外協力隊は、国際協力事業団が実施する政府事業で、32年間に約16,000名の協力隊員が50数か国に及ぶ世界各地で協力活動を行っています。

総務庁青少年対策本部の青少年国際交流事業の参加者からも、多くの青年海外協力隊員が出ていることを皆さんはご存じのことと思います。また、国際協力事業団の職員にも既参加青年が多く採用されています。

自分の力を海外で役立てたいと思っている貴方！ 厳しい試験ですが、チャレンジしてみませんか。

**募集期間：**平成10年4月15日（水）～5月31日（日）

**募集規模：**約140職種、約800名を募集

**応募資格：**満20歳から満39歳（平成10年5月31日現在）までの日本国籍を持つ方

**派遣期間：**2年間（単身赴任／現地生活費・国内積立金等が支給されます。）

**選考試験：**一次選考／筆記試験（技術、英語、協力隊員適正テスト）と健康診断（書類審査）

平成10年6月21日（日）、各都道府県で実施。

二次選考／面接試験（個人面接・技術面接）と健康診断（検診）

平成10年7月29日（水）～8月6日（木）の指定日（土日除く）に東京で実施。

**訓練：**出発前に約80日の合宿訓練を受けます。

**応募方法：**所定の願書を協力隊事務局に提出のこと。締切／平成10年5月31日（消印有効）

〔問い合わせ・願書請求〕 〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインスタワー6F

国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 ☎ 03-5352-7261

〔詳細資料の請求について〕 詳細資料は、返信用切手390円分を同封の上、次の宛先まで請求して下さい。

（〒163-8696 東京都新宿区新宿郵便局留 協力隊事務局国内第二課育てる会ニュース係）



## 第18回青少年国際理解セミナー

### 「第10回世界青年の船」帰国報告会

平成9年度の「第10回世界青年の船」参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。総務庁青少年国際交流事業について知りたいと思っている友人知人の方々に、ぜひ知らせてあげてください。

総務庁青少年対策本部が行う青少年国際交流事業についての全体的説明コーナーもありますので、他の事業に興味のある方にも声をかけてあげてください。

日 時：1998年6月28日（日） 12:30～16:30

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際会議室

参加費：無料

主な内容：船内及びセーシェル、ケニア、ヨルダン、オマーンでの活動を撮影した写真や団員が持ち帰った品々の展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに各国のお茶やお菓子を楽しみながら参加していただきます。

申込み：(財)青少年国際交流推進センターの「セミナー係」まで電話、FAX又は葉書にてお申込み下さい。宛先は、下欄の(財)青少年国際交流推進センター事務局へ。

#### ブロック大会のお知らせ

*北海道・東北ブロック	山形県	9月5日(土)・6日(日)
*中部ブロック	三重県	9月12日(土)・13日(日)
*近畿ブロック	和歌山県	7月4日(土)・5日(日)
*中国ブロック	山口県	8月1日(土)・2日(日)

#### 編集後記

(財)青少年国際交流推進センターもこの4月で、設立4周年を迎えました。日本青年国際交流機構との二人三脚で一歩ずつ歩んできました。

より広い、国際交流を基盤とした社会活動の展開を目指して、今年も実績を積み重ねながら確実な地盤作りのために頑張らしましょう。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM (マクロコズム) 5月号 Vol.22 1998年5月1日発行 (隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

編集協力：総務庁青少年対策本部

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

日本青年国際交流機構

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

定 価：198円 (本体189円)

TEL 03-3249-0767

印刷所：株式会社 絢文社

FAX 03-3639-2436

TEL 03-3959-3960

e-mail LDP 04056 @niftyserve.or.jp



## 福島大会、盛況のうちに終了!

日本青年国際交流機構第13回全国大会  
第4回青少年国際交流全国フォーラム

うつくしまふくしま '97

～無限にひろがるコミュニケーション～

日程：平成9年11月29日(土)～30日(日)

会場：「J-VILLAGE」



◀ 宗像実行委員長のあいさつで大会が開会  
実行委員の皆さんの努力で楽しい大会となりました



▲ コミュニケーションを深めました。今後の活動の大きな糧になりました



夜の懇談会は、全員そろって「鏡割り」への掛け声でスタート ▶

### 日本青年国際交流機構第14回大会徳島大会を成功させよう!

明石大橋の開通を記念して、徳島県青年国際交流機構のメンバーが「ぜひ今年の全国大会は徳島でと招いてくれた大会です。鳴門の地に、友人や家族も誘って楽しく集いましょう。

次号のマクロコズムでは、詳細が掲載されますのでお楽しみに!

日程：平成10年11月28日(土)～29日(日) 会場：徳島県鳴門市「ルネッサンス リゾート ナルト」



## シンガポール・リフレッシュクルーズ 1997 より

昨年(1996年)の9月22日～10月2日の日程で、第24回「東南アジア青年の船」の最初の寄港地であるシンガポールまで、青少年国際交流事後活動推進洋上研修会議が前年に引続き実施されました。参加者は、日本参加青年や各国のナショナル・リーダー、アセアンのホストファミリーとの交流を行い、有意義な時間を過ごすとともに、久しぶりの船上生活、そしてシンガポールでのプログラムを楽しみました。

### リフレッシュクルーズに参加して

「第2回世界青年の船」既参加青年  
武田 政則

「あの感動をもう一度」から始まるシンガポール・リフレッシュクルーズの募集が目にとまり、7年前に参加した「世界青年の船」の感動が忘れられずに友人夫妻及び妻とともに参加しました。

参加を終えて、まず感じたことは、接したことがなかった国の人々を知ること、今まで気付かなかった日本また日本人の長所短所を知ることができ、自分の狭い視野が一層広がったことです。

また、桜井先生(船内での講師)との出会いは、ゲーム(体験実習)を通して地球の現状及び自分自身をより深く知るチャンスを与えて頂き有意義なものでした。教えるのではなく気付かせる講義

であったため印象に深く残りました。

共に乗船していた「東南アジア青年の船」の外国参加者との交流の中で感じたことは、“Why”という言葉が多く出てきたこと。異なった習慣の国に育ち、異なる考えを持っている人と接し理解することで、自分の考えの甘さを痛感し、また宗教等は異なっても求めているものは同じ「幸福」であるという当たり前のことに改めて気付きました。

また、シンガポール入港前日の日本参加青年によるプレゼンテーションを見て、7年前を思い出すと共に、若さあふれる活気をうらやましく思いました。そして、友人とトップデッキで波の音を聞きながらゆったりと過ごした一時は、最高のリフレッシュ・タイムとなりました。

今年は、マニラへ入港とのこと。皆さんも是非参加して「あの感動をもう一度！」



▲ 異文化理解ワークショップでの一コマ



▲ フォーマルディナーにて(左から二人目が筆者)

今年もご好評にお応えして「マニラ・リフレッシュクルーズ」を実施致します。

詳細をご希望の方は日本青年国際交流機構事務局にFAXまたは葉書にて「クルーズ資料希望」と記載の上お送り下さい。申込み用紙を同封して詳細資料をお送りします。

【お問い合わせ先】 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6F

日本青年国際交流機構事務局 [TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436]